【論文の内容の要旨】

多文化社会における家族形成移民としての国際養子縁組に関する研究
――韓国養子の事例分析からみる新しいトランス・ナショナリティの可能性――

芝　真里

１．課題設定

本博士論文（以下では「本論文」と称する）は、「多文化社会における家族形成移民としての国際養子縁組に関する研究」をテーマに、おもに韓国から送り出された国際養子たちを対象に、その関係者へのインタビューに基づく「語り」を中心に事例分析から展開し、そしてその知見に基づいて新しいトランス・ナショナリティ（transnationality）の可能性をも問うものである。なお本論文で取り上げるトランス・ナショナリティとは、西原（2016: 72-3）によるトランスナショナリズム論に依拠しており、①本稿で主な検討対象とする韓国から送り出された国際養子たちや関係者たちがトランス・ナショナルに移動する局面において、②そうした移動――とりわけその地理的移動と社会的移動――の事実を、方法論的トランスナショナリズムによって検討する中から見えてくる様相として、③これまで境界線上の存在者として固定的に見なされがちであった国際養子たちやその関係者たちがナショナルな境界を念頭にしつつも、さまざまな境界を越えて繋がりあうことによって、その相互行為の中から導き出す自らの新たな視点や位置を、社会学的に描き出すための用語と捉えている。つまり本論文では、国際養子というトランス・ナショナルな移動によって出現する存在者が、国境だけではないさまざまな境界――血縁・地縁やマイノリティの枠――を超えて人々と交流する中で見出す視点や立ち位置について、検討することを目指している。

２．方　法

調査対象者（データ）　本論文での調査対象は、まず１）国際養子の受入国として代表的な米国と北欧諸国で育った国際養子、なかでも国際養子縁組をめぐる問題について活発に発言し続けている韓国出自の養子たちを中心としている。そして２）養家族の自助団体関係者、３）国際養子たちの家族、とくに配偶者や第２世代、４）国際養子縁組取次団体や養家族の自助団体、そして支援団体の関係者ら（例えば韓国養子たちを母国・韓国にて支援している団体の関係者、そして養子たちが支援している未婚母たちの団体の関係者）も対象の範疇としている。

手続き　本論文で参照するインタビューおよび資料収集は、2009 年から 2017 年にかけて、米国・スウェーデン・韓国で行われたものである。なおインタビューは、「インフォーマントのバックグラウンド」「（他の）養子や所属組織との関わり」「母国文化保持活動（カ

ルチャー・キーピング）の経験」「重国籍取得への意思」等を中心とする質問項目を記したインタビュー・シートを基に行われた。また対象者の反応について多様性を予期し、インタビューの流れによっては、質問内容を適宜追加・変更する、いわゆる半構造化インタビューの形式が採られた。加えて、韓国養子の世界大会（2013 IKAA Gathering in Seoul）など彼らの自助組織主催のイベントへの参与観察で得られた考察も本論文には含まれる。

３．各章の構成と内容

第１章では、国際養子縁組についてこれまで語られてきたことを確認し、そしてとくにアメリカにおける「養子たちの母国文化を保つ行為」（＝母国文化保持活動：「カルチャー・キーピング」）によって――かれらを同化するのではなく――かれらの多文化性を保持させようとしている動きを検討した。まず、国際養子縁組の歴史と論議、そしてとくに韓国養子たちがオピニオン・リーダーとして位置づけられてきた過程について述べた。また、カルチャー・キーピングを、当事者である養子や養親、かれらをとりまく人々が実践している様相を捉え、国際養子縁組の場でいかに〈文化〉というものが重要と見なされているのかについて述べた。

第２章では、韓国養子の受入国における問題について論じる。まず受入国の代表的な存在のひとつであるスウェーデンの韓国養子たちをとりまく動きについて述べ、そこでかれらの位置づけがどのように変化してきたのかを探った。「静かなる移民」と呼ばれる国際養子たちが、社会で受け入れられ、自己の位置づけを確立するためには、一定の〈文化〉を身に着ける取り組みが求められる。そこでスウェーデン在住の韓国養子たちは自助団体を立ち上げ、自ら「母国を知る活動」を行ってきた。このスウェーデン社会における養子たち主導で行われてきた「カルチャー・キーピング」的活動は、実は周りからの期待に応えるため、つまり受入国や母国からの期待に応えるようなアイデンティティの形成をめざす行為につながる傾向にあると考察した。

第３章では、韓国養子たちの送出国である韓国におけるかれらの位置づけについて述べ、受入国・送出国のいずれにおいてもかれらや周りの人々、そして社会との間に起きている摩擦――国籍とアイデンティティを中心とする問題――について論じた。本章の焦点は送出国側である韓国社会と養子たちとの関係にあり、これまで韓国から世界各地へ送り出されてきた国際養子について、かれらの「重国籍」取得とアイデンティティの問題が論じられた。本章での考察として、第１に、「国民」という枠のあいまいさが挙げられている。韓国養子たちは重国籍制度により法的地位は韓国の「国民」となりうる。だが、それはあくまでも「国益に寄与する外国からの民」という位置づけに留まる。第２に、かれらにとって「重国籍」という選択は、両国への帰属というよりもむしろ、どちらか一方に完全に所属することの居心地の悪さを示していた。そして第３に、かれらのアイデンティティは、重国籍のように複数のアイデンティティをもつのではなく、それとは異なるトランス・ナショナルなアイデンティティを志向しつつあることが考察された。

第４章と**第５章**では、韓国養子たちの今後の方向性について、グローバル・ナショナル・ローカルの各レベルから探った。前述のように、受入国と送出国それぞれの国籍やナショナル・アイデンティティのいずれにも完璧に合致することがないアンビバレントな状態にあるにもかかわらず、周りからは両国間の「架け橋」としての行為を期待されている韓国養子たちが、自らの位置づけを改めて探るべく、この 30 年ほどの間に世界各地に自助団体を立ち上げ、さらにはそれを越境的な組織へと発展を遂げてきた様相を検討する。着目点は、かれらがグローバルな志向性を示すとともに、ローカル社会――母国である韓国社会――との関係構築および社会変容に向けた働きかけを強化してきたことである。他方で、かれらのトランス・ナショナルな働きかけが必ずしも韓国社会に受け入れられていないこと、そしてかれらと韓国社会をうまく架橋しようとする〈媒介者〉的な人々が存在していることにも、本論文は着目している。

終章では、本論文の結論と課題を示すことを試みた。とくに韓国養子たちの動きが示唆するものから抽象の度合いを上げ、一般化しうる位相での今後の方向性・可能性、そして今後の課題としての新たな「トランス・ナショナリティ」の動きを検討した。その議論の狙いは、それまでの知見を踏まえて、脱国民文化と脱アイデンティティの問題を検討すること、そして領域的アイデンティティをこえる課題としてのトランス・ナショナリティの可能性を提示することにある。

以　上